

日光に折り紙自販機



自動販売機で買った折り紙作品を持つ観光客=日光市で

日光市の日光東照宮近くに、折り紙作品を取り扱う自動販売機が登場した。作品は福祉施設に通う障害者の手作り。観光客らが旅の思い出に買い求め、売れ行きも好調だ。設置した会社は「障害のある人にやりがいのある仕事をしてもらうモデルケースになれば」と意気込んでいる。

福祉施設の障害者手作り



日光市の自動販売機で扱われる折り紙作品

今月初旬、最寄り駅から東照宮まで観光客が向かう日光街道。道ばたに、カラフルな和柄のデザインを施した中古のたばこの自販機があり、「折紙」の文字が躍る。友人と一緒に観光に来た会社員の猪瀬奏恵さん(三二)

〔さいたま市〕は、たばこ箱大のパッケージから折り鶴を取り出し「日光のイメージにぴったり」と声を上げた。

箱に入っているQRコードがフェイスブックにつながっており、写真で作り手の様子などを紹介している。郷間さんは「買つた人が障害者を身近に感じるべききっかけになれば」と期待する。今後はフェイスブックから観光情報も発信する予定だ。和気さんは「日光の新しい観光資源として定着させ、就労支援として他の事業所にも広げたい」と話している。

売れ行き好調「モデルケースに」

自販機は宇都宮市のIT関連企業「アクシス」が昨年十月に設置した。「日光に折り紙の自販機を置くと面白そう」「障害者の就労支援に」。社員との雑談から生まれたアイデアを社長の和氣悟志さん(四二)が採用。「つるのはねプロジェクト」と銘打ち、日光市の就労支援事業所「すかい」の協力を得て実現した。

手掛けるのは知的障害のある女性三人だ。鶴やかぶと、まりなどの五作品一組で二百円。種類は一応決まっているが「楽しんで取り組むのが大事。その時々で作品が変わることも」。中身は箱を開けてのお楽しみだ。

設置当初、五十組超を販売したところ、一日ほどで完売した。三ヶ月で約七百組が売れ、制作が追いつかないこともある。これまで仕事が困難だったという三人。事業所長の郷間優子さん(三四)は「みんな生き生きと作業している」と手応えを感じている。

これまで仕事が困難だったという三人。事業所長の郷間優子さんは「みんな生き生きと作業している」と手応えを感じている。